

117. 長浜市越前塚遺跡略報

1. はじめに

越前塚遺跡は、長浜市加納町に所在し、米川上流左岸の自然堤防上の雑木林中に小規模な前方後円墳形をした墳丘が残っており越前塚古墳として周知されていた。このことから付近に小規模な古墳群の存在が予想されていた。

ところが、この地域について、湖北開発事業団による約22,000㎡の工場用地造成の計画がなされたため、長浜市教育委員会は、昭和56年に試掘調査を行なった。この結果、越前塚古墳が、従来の予想以上の規模を有することが判明したほか、弥生時代から古墳時代にかけての一大墓地群であることが判明した。このため、翌昭和57年度に遺構の全貌を把握するため、約15,500㎡について発掘調査を行なった。

この調査によって、越前塚古墳をはじめ、周溝状遺構70基以上、掘立柱建物跡8棟以上、多数の土壌を検出した。

遺構の中心は、周溝状遺構であるが、これらのほとんどは「方形周溝墓」および古墳などの古代墳墓に伴うものである。遺構は、すべて耕作等によって削平されて、墳丘や主体部は残っていない。その意味では資料的価値に欠ける部分もあろうが、70基以上におよぶ墓地群の発見は、規模の面からも県内有数のものである。また、後述のように、年代毎の墓域の変遷をある程度把握することができるという点でも貴重である。従って、本報告に先立ちその概略について報告したい。

2. 位置及び歴史環境

今回調査を行なった地域は、長浜市加納町字越前塚および字狐塚のほぼ全域である。長浜平野最大の河口を有する米川の上流が加納町付近で南流と北流に分かれる。本遺跡は、このそれぞれの流路がつくる谷と谷との間にはさまれた舌状台地上に立地し、標高107～108mをはかる。

「方形周溝墓」は、弥生時代中期末から古墳時代前期にかけてつくられるが、この時期に相当する集落跡としては、大辰巳・鴨田・宮司東・高田など弥生時代後期から古墳時代前期にかけて大集落を営むものがほとんどである。また、同時期の墓地は、大東遺跡のほ

か、近江町奥松戸遺跡、同狐塚遺跡があり、長浜平野でも比較的南部で検出されている。本遺跡の母胎となった集落を付近に求めた場合、本遺跡西方の加納町集落と重複するかたちで散布地(加納町遺跡)が所在するが、年代等は明らかではない。

古墳時代中期以降については、本遺跡の南方約0.2kmには、小規模前方後円墳と思われる上藤塚古墳が所在し、南東方向約1.2kmには、市内最大の前方後円墳である丸岡塚古墳が所在する。

3. 遺構及び出土遺物

(弥生時代中期) この時期の周溝状遺構は、総数7基を数え、いずれも調査区域の東半部において検出された。このうち最大のもは、9号で、周溝の幅が1.1m～3.5m、台状部の1辺が約11mの規模である。最小のもは、70号で、周溝の幅が0.8m～2.0m、台状部の1辺が約8mの規模である。

この時期の遺構の特徴としては、ほとんどの周溝が単独で造られるか、あるいは周溝が接する程度で、明確な共有関係を示さないことがあげられる。

出土土器は、やや古い時期(Ⅲ様式)の特徴を有するものも含まれるが、ほぼⅣ様式の時期に比定できよ

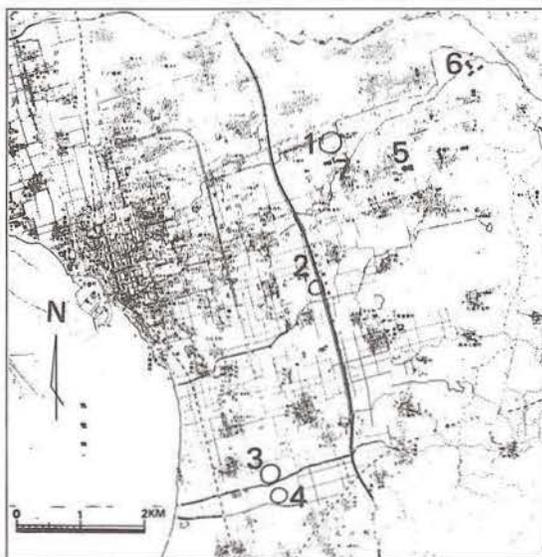


図1 遺跡位置

- | | |
|----------|----------|
| 1. 越前塚遺跡 | 5. 丸岡遺跡 |
| 2. 大東遺跡 | 6. 茶臼山古墳 |
| 3. 奥松戸遺跡 | 7. 上藤塚古墳 |
| 4. 狐塚遺跡 | |

う。その中で、70号周溝西辺から出土した細頸壺は、体部下方に焼成後の穿孔を受けており、明らかに供献的要素を有している。なお、本遺跡出土土器中でこのような穿孔を確認できたものは、この1点のみであった。この他、4号出土の高蔵式の細頸壺、34号出土の水差形土器等がある。

(弥生時代後期) 出土遺物によって後期に比定できるものは23基であるが、共有関係や位置関係で同時期に含めうるものを加えれば総数36基を数える。これらは、調査区域の西半部で検出された1群と東半部において中期遺構と隣接する形で造られた1群とで大別できそうである。最大の遺構は、2号・21号・31号等で、周溝の幅が1.3~3.4m、台状部の1辺が約12mの規模である。最小のものは、25号・58号等で、周溝の幅が0.5m~1.2m、台状部の1辺が約5.5mの規模である。

この時期の周溝状遺構は、各遺構が単独で造営されることが少なく、ほとんどが周溝を共有するか、あるいは接するという形態をなしている。また、このことから、さらに幾つかのグループに分けることが可能である。

一例をあげれば、調査区域南西に位置する16号・17号・22号・25号・58号等互いに溝を共有する一群。2号・21号等大型のものを中心として、それを囲むように造られた中小の周溝墓。また、調査区域の東端付近の10号・28号・31号・35号等互いに溝が接し、方位を同じくする一群などである。

土器は、「受口状口縁」を有するものが多く、甕・鉢類のほとんどがこの形式である。この傾向は、壺類にも及んでいる。この中で、58号・35号からは、畿内V様式に特徴的な長頸壺が出土しており、40号からは、「受口状口縁」甕と共に東海地方山中式の広口壺が出土した。この他に、やはり後期末頃に比定できる15号からは手焙形土器が出土した。

(古墳時代前期) この時期の遺構は総数8基で、ほとんどが調査区域東半部で検出された。これらの多くが、弥生時代中、後期の遺構を切って造られている。

この時期では、前時代的な方形プランの他に、新たに円形プランのものが採用される。方形のものでは55号が最大で、溝の幅が4.8m、台状の一辺が、約14mである。最小のものは56号で、周溝の幅が0.8m、台状部の一辺が5.5mである。円形のもの、直径が約9m、溝の幅が約1mで、ほぼ同一形態である。

この時期の土器は、量的に非常に少ない。その中で、55号からは、比較的まとまった量の土器が出土した。周溝からは「受口状口縁」甕や広口壺と共に、布留式の甕、元屋敷式の高坏と「S字状口縁」甕、月影式の甕、鉢等が出土した。この時期の長浜平野における初



図2-1
1号出土円筒埴輪



図2-2 1号出土家形埴輪

期土師器の様相の一端を表わしている。

(古墳時代中期) この時期の遺構としては、越前塚古墳、1号・30号がある。

1号は、検出遺構の中で最も残存度がよく、直径12.8m、周濠幅2.0~2.9mを計る。周濠北側と西側に陸橋部らしき、周濠の未掘部分を残している。

越前塚古墳は、直径約38mの円形プランを有し、周濠幅が約8mを計る。

30号は、直径10.8の円形プランで、周濠幅が約2mを計る。

1号の周濠全域から多数の円筒埴輪片が出土し、特に周濠の南辺からは、2個体以上の家形埴輪の他に須恵器坏身・坏蓋・甕・壺等、土師器高坏、小型壺等がまとまって出土した。これらの遺物から1号の築造年代は5世紀末頃と考えられる。

越前塚古墳周濠からは、須恵器高坏、同蓋、坏身、平瓶の他埴輪片も出土した。築造年代は、これらの遺物から5世紀末頃と考えられる。

30号も周濠から須恵器坏身、坏蓋、高坏の脚等が出土した。

(古墳時代後期) 39号、43号の2基がこの時期に相当する。39号は、プランが前方後円形を呈するもので、前方部長が12.8m、後円部径が19.9mで、周濠の幅が2.8~11.0mを計るものである。43号は、方形プランを有し、周濠東辺に陸橋らしき周濠の未掘部分を残す。台状部の1辺が約28.8m、周濠の幅が4.6m~5.8mを計る。両者からは、須恵器甕、坏身、坏蓋などが少量出土している。これらから築造年代を6世紀後半頃に求めることができる。

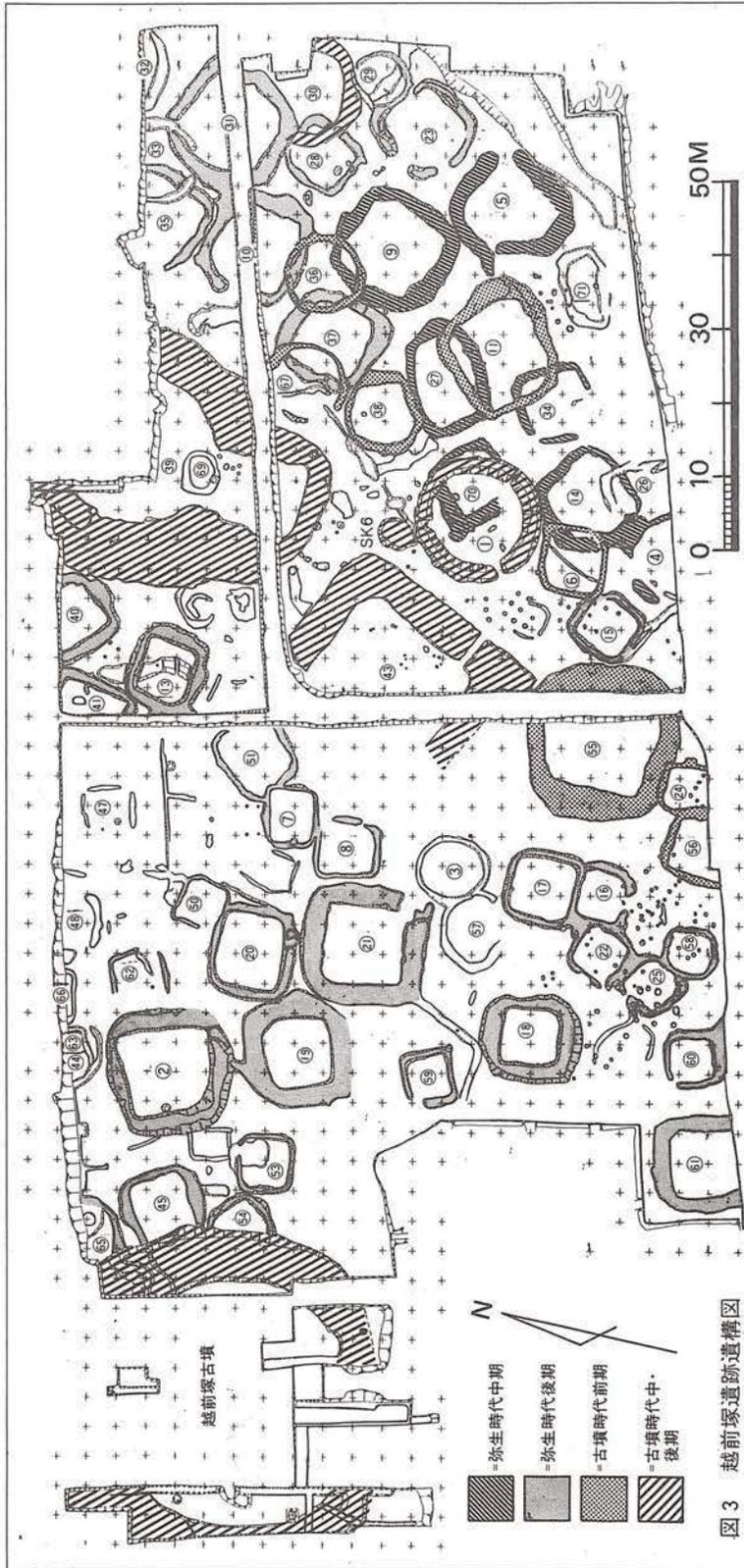


図3 越前塚遺跡遺構図

4. まとめ

以上、略述したように、本遺跡の周溝状遺構は、5つの時期に大別される。すなわち、Ⅰ期-弥生時代中期末、Ⅱ期-弥生時代後期、Ⅲ期-古墳時代前期、Ⅳ期-古墳時代中期、Ⅴ期-古墳時代後期である。Ⅰ～Ⅲ期のものは、弥生時代的な墓制である「方形周溝墓」に相当するものであり、Ⅳ・Ⅴ期のものは古墳である。

Ⅰ～Ⅲ期については、時間的な断絶はほとんどなく継続して造られている。しかし、この中にあって、後期の周溝墓が、中期の周溝墓を避けるか、あるいは周溝を接する程度であるのに対して、古墳時代前期の周溝墓は、弥生時代中期のものも後期のものも壊しながら造られる傾向にある。時代の変換点におけるこのような傾向は、その母集団の断絶を思わせるものがある。

Ⅰ～Ⅲ期における共通の特徴は、その占地において認められる。すなわち、特に調査区域の東半部では、東北-南西方向の線状に墓域を拡張した傾向が認められる。旧地形が平均的に削平されている現状では確認することはできないが、遺構のベースに砂礫層が認められることは、この地が常時河川の氾濫に見舞われやすい条件にあったことを物語るものである。しかも、砂礫層の堆積層と周溝墓の拡張方向と一致するので、周溝墓の造営期であっても、この地が同様の自然条件下にあったことが考えられる。

Ⅳ期のうち、越前塚古墳については、円形のプランをもつことが判明したが、本来の墳形について若干の問題を残した。周濠の北辺の外側かたが直線的に延びる傾向にあるからである。西辺は工場用地等で切られているため確認できないが、周濠がさらに西に延びた場合、前方後円墳の可能性も残る。

1号については、その破壊を受けた時期が問題となる。1号墳丘に立てられていたと考えられる埴輪類のほとんどが周濠内の底部に堆積していた。中には、円筒埴輪が転倒して、底を上方に向けて底部に落ち込んでいるものもあった。このことは、この古墳が、築造されて間もない時期に墳丘の破壊を受けたことを物語るものであろう。さらに、埴輪などの破損状況からみても雨水等による墳丘の自然崩壊によるものとは考え難く、人工的な破壊の可能性が高いと思われる。破壊の時期について一つの手掛りとなるのは、1号に北接する土壌（SK6）内で、これも底から、1号周濠南辺から出土した家形埴輪と同一個体と思われる破風板が出土している。この土壌の開掘時期が、出土土器によれば6世紀後半頃と推定されるので、その頃には1号は破壊を受けていたことになろう。この時期は、西接する43号、北方の39号の築造時期にもあたる。1号に対する人工的な破壊が43号、39号の築造に係るとすれば、ここにも母集団の断絶があったことになろう。最後に、古墳群としての問題点を指摘しておきたい。

本遺跡は、古墳群としては5世紀末頃成立した。越前塚古墳が前方後円墳だとすれば首長墓として捉えることも可能である。また、本遺跡南方約0.2kmに、小型前方後円墳である上瀬塚古墳が所在し、これも本来群を形成していたことが考えられる。この古墳群は、出土土器から6世紀後半頃に造営時期の一点をおくことができる。両古墳群の造営時期は、6世紀後半において重複し、しかも位置的關係から両者が単独で成立していたとは考え難い。むしろ首長墓を中心として、両古墳群を包括する一大墓地群が中期から後期にかけて営まれていたと考える方が妥当であろう。

この場合、横山丘陵北部に茶臼山古墳をはじめ次々と前方後円墳を築き、5世紀末頃、湖北最大の前方後円墳である丸岡塚古墳を築いてそのピークに達すると同時に終焉を迎えた首長の墓域との関連を見落すことはできない。この後、長浜平野では他に顕著な墓域は形成されない。丸岡塚古墳と1.2kmの近距離にある本古墳群の成立がこのような動向と無縁であるとは考え難い。
（宮成良佐・佐野誠一）

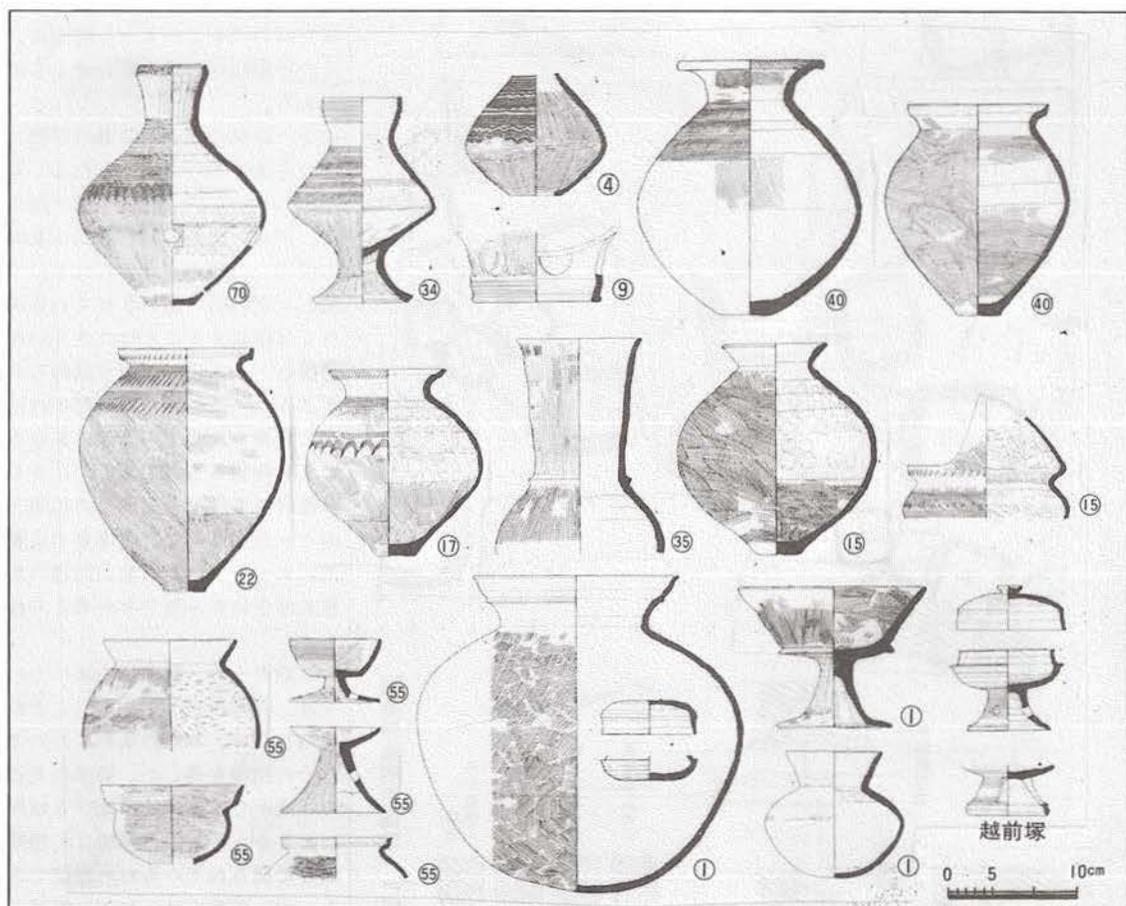


図4 越前塚遺跡出土土器（土器右下の数字は出土遺構番号）